

# ドイツ語圏スイスの標準語を決めるのは誰か

## —書きことばにおける文法的スイス語法の考察を中心に—

だいき ゆうた  
大喜 祐太

京都大学大学院 / スイス政府奨学制度特別研究員

daigi.yuta.82c@st.kyoto-u.ac.jp

キーワード：言語規範、文法的独自性、スイス式標準ドイツ語、スイス語法

### 1. はじめに

ある言語表現が標準的なものであるとみなされる基準は何か。母語話者にとっての言語的許容度なのか、あるいは、普及の度合いなのか。それとも、言語の規範によってなのか。本稿の目的は、ドイツで使用される標準ドイツ語とは異なる「スイス式標準ドイツ語」(Schweizerhochdeutsch) の文法的特徴に焦点を当て、ドイツ語圏スイスの書きことばの言語規範について考察することにある。スイス語法の文法的独自性に関わる表現は、辞書の記述にも反映されていない場合が多く、しかもそもそも方言と標準変種との相違を判断することが難しいため、語彙的独自性よりも標準語として認識されることが困難となっている<sup>1</sup>。それゆえ、文法的特徴は、方言の影響を受けた単なる誤用とみなされてしまう。たとえば、ドイツの標準ドイツ語を基準とした、いわゆる「正書法」(Rechtschreibung) に則した辞書や文法書の中では、スイス語法の文法的独自性は「間違い」であるとみなされる場合が多いのが実情である。本研究では、スイスドイツ語圏の実際の書きことば、具体的には、日常的テキスト・文学的テキスト・ジャーナリズム的テキストの中で、文法的スイス語法がどのように扱われているのかについて、語彙的スイス語法と併せて議論する。

本稿では、第2節で、ドイツ語圏スイスの方言と標準語の二言語併用状況を概観し、スイス式標準ドイツ語を巡る問題を提起する。第3節では、スイス式標準ドイツ語の定義をこれまでの先行研究を基に吟味し、辞書内での記述およびスイス語法の分類について考察する。つづいて第4節では、第3節でのスイス語法の分類に基づいて、主に Schweizer Text Korpus (以下、CHTK) から抽出した用例をテキストの種類別に検討する<sup>2</sup>。第5節では、コーパス調査の結果を踏まえて、ドイツ語圏スイスにおける標準語のあり方について議論したい。

### 2. 問題提起

スイス文学を代表する劇作家である Friedrich Dürrenmatt (1921-1990) は、1967年に著した「言語についての個人的なこと」(Persönliches über Sprache) と題するエッセイの中で、次のように述べている。

(ドイツ語圏では) 諸々の方言は生き生きと残っており、人びとの言語的潜在意識の中に活力を保ったまま作用し続けている。話されているドイツ語と書かれたドイツ語は、いっそう鮮明に区別されている。一つの学問的中心はなく、一つの文化的中心というものもない。それゆえ地方というものがない。文化的中心なくしては、地方について語ることは意味がないのである。(Dürrenmatt 1998: 169)

Dürrenmatt のドイツ語に対する洞察には次の二点が含意されている。すなわち、(i) 「複数中心的言語」(eine plurzentrische Sprache) としてのドイツ語のあり方、(ii) 「話しことば」としてのスイスのドイツ語と「書きことば」としてのスイスのドイツ語との区別である。第一に、Meyer and Bickel (2006: 15) でも指摘されているように、ドイツの標準語は、英語と同じように、多くの国家的な中心部(ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン)で公用語として使用されており、隣接する国々の地域的公用語でもある(ベルギー西部、ルクセンブルク、南チロル)。それゆえ、ドイツ語は「複数中心的言語」と呼ばれる。第二に、ドイツ語圏スイスにおける、話しことばとしてのドイツ語と書きことばとしてのドイツ語の間には、大きな隔りがある。河崎 (2008: 45) によれば「スイスのドイツ語(アレマン方言)は、標準ドイツ語の話し手にはとうてい理解できないことばであるにもかかわらず、スイスの言語というわけではなくドイツの方言とされる。その理由は、スイスのドイツ語は、スイスという国の中で、書きことばとして使われている標準ドイツ語と並存しているからである」。先の引用で Dürrenmatt が述べていることの一つは、このような話しことばとしての方言と書きことばとしての標準ドイツ語の二言語併用状況である。それに加えてスイスでは、「地方方言から標準語に至る言語変種が連続しているため、その境界線がはっきりしない」(河崎 2008: 45)。すなわち、ドイツ語圏スイスでは標準ドイツ語にも幾層もの異なる水準があるということである。それでは、一体どのようにしてスイス式標準ドイツ語は定められているのか。

### 3. スイス式標準ドイツ語

Glück (2010: 667) の定義に従えば、「標準語」(Standardsprache/Hochsprache) とは、複数のヴァリエーションをもつ表現の選定に際して国の機関がある指針を与え、教育機関や官庁などで諸々の規則を明示することを通じて示される一つの言語である<sup>3</sup>。高橋 (2009a: 30-38) でも詳述されているように、スイスでは、ドイツ語・フランス語・イタリア語・レトロマンシュ語の4言語が公用語として規定され、各州(カントン)がそれぞれの言語を決定する属地主義をとっている。さらに、熊坂 (2004: 39) によれば、学校制度に関する権限は州が有しており、ドイツ語圏スイス各州の教育言語は標準ドイツ語である。

スイスの連邦評議会事務局 (Bundeskanzlei) は、標準ドイツ語の正書法の規則を示すために、スイスでの慣用を考慮した正書法の手引書 *Leitfaden zur deutschen Rechtschreibung* を作成している。教育機関に対しては、州ごとの代表者から構成される教育委員会 (Schweizerische Konferenz der Kantonalen Erziehungsdirektion) が正書法の改正につい

て記した *Die Neuregelung der deutschen Rechtschreibung* を発行し、さらに教育現場での Duden (2013b) の使用を推奨している。このようなスイスで用いられる標準ドイツ語、すなわちスイス式標準ドイツ語については、Ammon *et al.* (2004), Meyer and Bickel (2006), Concetta Di Paolo and Glaser (2006), Bickel and Landolt (2012), 高橋 (2009b), 熊坂 (2010, 2011) などの先行研究でも議論がなされている。

### 3.1 スイス式標準ドイツ語の特徴

熊坂 (2010: 22) によれば、「ドイツ語圏のスイスの人びとによって、話し言葉として用いられるのが『スイスドイツ語』(Schweizerdeutsch) であるのに対し、書き言葉として用いられるのは、スイスの標準変種である標準ドイツ語、すなわち『スイス式標準ドイツ語』(Schweizerhochdeutsch)」である。また、Polenz (1999: 443) でも指摘されているように、スイス全土もしくは諸外国に対する情報発信などの公的な言語使用の場では、口頭でのコミュニケーションであっても標準ドイツ語が用いられることが多い。たとえば、大学の講義などでドイツからの標準ドイツ語話者や外国語としてドイツ語を使用する人びとが集まる状況では、基本的に標準ドイツ語が用いられることになる。とはいえ、その際に使用される言語は完全に標準ドイツ語と同様ではない。とりわけ、語彙面ではドイツ本国のドイツ語とは多くの異なる表現が存在する。たとえば、「歩道」という意味に当たるドイツ語の名詞には、「Bürgersteig“, „Gehweg“, „Gehsteig“ といった語があるが、スイスでは „Trottoir“ という言い方が好まれる<sup>4</sup>。これはもちろん、方言的な用法から影響を受けたものだが、小説や新聞などでも用いられるため、単に方言としてのスイスドイツ語とみなすことはできない。つまり、話しことばとしてのスイスドイツ語に対して、書きことばとしての標準ドイツ語があるのではなく、その間隙を連続的に埋めるものとして、スイスでの慣習に適応したスイス式標準ドイツ語が存在するのである。実際にスイスの出版物をつぶさに観察すると、標準ドイツ語にはない特徴に気づく。次の文章は、スイスのバーゼルで1986年に出版された Heinrich Kuhn の小説、*Schatz und Muus* の中の一節である。

(1) *Er streichelte ihre Hand. Hast du immer so kalt, fragte er. Im Spital ist es mir zum erstenmal aufgefallen.*

(Hg. Er streichelte ihre Hand. Ist dir immer so kalt, fragte er. Im Krankenhaus ist es mir zum ersten Mal aufgefallen.)

(E. He stroked her hand. Are you cold? He asked. I noticed something for the first time in the hospital.) (Kuhn 1986: 100)<sup>5</sup>

(1) の文章は、標準ドイツ語の書きことばとの間にいくつかの相違点を含んでいる。すなわち、(i) sein (E. be) や haben (E. have) の使用、(ii) Hg. Krankenhaus/Shg. Spital 「病院」を意味する語彙、(iii) 「初めて」を意味する語の綴りの三点である。(i) については、Dürscheid and Hefti (2006) の先行研究や Ammon *et al.* (2004), Meyer and Bickel (2006)

などの辞書でも言及されている。大喜 (2013) では、次のような例を挙げている。

- (2) a. *Ich habe kalt.* (Shg.)  
 I have.1SG cold  
 b. *Mir ist kalt.* (Hg.)  
 me.DAT be.3SG cold

(2) の各表現は、「わたしは寒い (寒さを感じている)」ということ表現している。標準ドイツ語では、通例 (2b) のように *sein* 動詞を使用するのに対し、スイス式標準ドイツ語 (2a) は、用例 (1) のように *haben* を使用している。

大喜 (2013) では、スイス式標準ドイツ語には、ある実体が存在していることを述べる非人称の存在表現に、動詞 *haben* (E. have) を用いた「*es hat* 非人称存在表現」と動詞 *geben* (E. give) を用いた「*es gibt* 非人称存在表現」があり、母語話者はその二つの表現を異なる状況に応じて使い分けていることを明らかにした。Ammon *et al.* (2004: 320) および Meyer and Bickel (2006: 141-142) でも言及されているように、これらの表現の使い分けは、ドイツ語圏スイスの方言や標準変種、もしくはドイツ南西部やオーストリア西部 (フォアアルルベルク周辺) の方言に現れる一方で、ドイツの標準ドイツ語には存在しない<sup>6</sup>。

こうした表現の考察で問題になったのは、スイスドイツ語とスイス式標準ドイツ語の境界に関わる問題である。熊坂 (2010: 88) でも指摘されているように、スイス式標準ドイツ語の特徴の多くは、方言としてのスイスドイツ語との共通点を備えている。そのため、ある一つの言語表現がスイス式標準ドイツ語として認められるものなのか、方言的な要素が色濃く残る「誤用」であるのかという判断は、言語内的な考察だけでは不十分であると言わざるを得ない。実際、Balmer (1950: 10) では、*es hat* 非人称存在表現は「フランス語法」(Gallizismen)、すなわちフランス語の *il y a* (E. it there has) から影響を受けた間違っ表現であり、「悪いドイツ語」(*schlechtes Deutsch*) とみなされている。河崎 (2008: 45) でも「言語と方言を言語学的に厳密に区別する際に、政治的・社会的な要素を組み込まざるを得なくなる」と指摘されているが、より微視的に語彙や文法などを観察した場合でも、そもそもある社会の中でどのような言語的特徴が「標準」とされるかは恣意的なものでありうる。したがって、ある地域的な言語表現が標準のものとして認識される基準は何であるのかを理解するためには、ある言語表現に対する規範や実際の使用状況を見きわめる必要があるということである。とりわけ、語彙と比較して、文法に関わる部分は、辞書などの記述にもあまり反映されておらず、方言と標準変種間の文法的相違を判別する困難さは、Elspaß (2010: 128), Dürscheid and Hefti (2006: 131), Dürscheid and Sutter (2014a) での考察の中でも明言されている。

### 3.2 スイス式標準ドイツ語とスイス語法

「スイス式標準ドイツ語」に対して、「スイス語法」(*Helvetismen*) という用語が存在す

る。スイス語法とは、スイスで特徴的な表現を意味し、Bickel and Landolt (2012: 7-8) によれば、「スイスの変種は、スイス語法、オーストリアではオーストリア語法 (Austriazismen)、ドイツではドイツ語法 (Teutonismen)」と呼ばれ、各国特有の語法が認められている。ただし、基本的には、Dürscheid and Sutter (2014a, 2014b), Weber-Arndt (2012), Farø (2004) などでも扱われているように、「スイス式標準ドイツ語」と「スイス語法」はほぼ同義的に用いられている。

Dürscheid and Sutter (2014a: 114) によれば、Duden (2011) 中の用例は、ほとんどがドイツで刊行された雑誌や新聞 (*Süddeutsche Zeitung*, *Frankfurter Rundschau*, *Die Zeit*, *Frankfurter Allgemeine Zeitung* など) から採取している。それに対して、オーストリアやスイスの発行物が参考にされることは、国際的なものも含めて皆無である。すなわち、スイスやオーストリアのみで見られる言語現象が Duden (2011) の正書法の中で正式なもののみなされることはあまり現実的でないということである。

表1 Duden (2011) 中の地域的特性の記述 (Dürscheid and Sutter 2014a)

北部ドイツ	南部ドイツ	ドイツ全体	スイス	オーストリア	合計
29	63	10	97	149	348

Duden (2011) では、表1から見て取れるように、ドイツ南部およびスイスや、特にオーストリアの地域的特性についての記述が多く、オーストリア式標準ドイツ語としてのオーストリア語法に対する意識は、ドイツやスイスにおける標準変種よりも浸透している。その一方で、「北部ドイツ語は、長い間ドイツの標準語と同一視され、南部ドイツ語はその標準語から逸脱したものである」(Dürscheid and Sutter 2014a: 114) とみなされてきたことが辞書記述の中にも現れている。

### 3.3 スイス式標準ドイツ語を扱う辞書

Duden (2011, 2013a) とは異なり、ドイツ語圏諸国の変種を扱った辞書である Ammon *et al.* (2004) の方針は、あらゆるドイツ語は「対称的」(symmetrisch) であり、各国のドイツ語の規範となるような唯一の標準変種は存在しないということである (Dürscheid and Sutter 2014b)。Bickel and Landolt (2012: 8) の『スイス式標準ドイツ語』も、地域的な特性は、正しい標準語からの逸脱とされるのではなく、同等の価値を備えたドイツ語の標準的な形式であるという方針を掲げている。言い換えれば、より規範的な性質を備える Duden (2011, 2013a) に対して、Ammon *et al.* (2004) や Bickel and Landolt (2012) は記述的な性質を持っているということである。1780年にチューリヒで創刊された日刊新聞 *Neue Zürcher Zeitung* (以下、NZZ) は、発行部数としては2014年の調査で124043部と多くはないが、スイス国内だけでなく世界的に情報を発信する国際紙として知られている<sup>7</sup>。Vademecum は、そのNZZの出版社が発行している、作家や編集者が執筆する際に用いる手引書であり、基本的には Duden (2013a) で扱われている標準ドイツ語の正書法に則し

ている。これらの辞書を比較してみると、ある表現が「地域的」(regional) という語によって、標準語から逸脱した方言として認識されているのか、もしくは、同等の標準変種間の差異であると考えられているのかは各辞書によってばらつきがあるということが分かる。

### 3.4 スイス語法の分類

Haas (2000: 100-101)、熊坂 (2011: 111-127) に従えば、スイス語法は、語彙がスイスに特徴的であるような「語彙的スイス語法」(lexikalische Helvetismen) と、語彙自体はドイツの標準ドイツ語でも用いられるが、意味がスイスに特徴的であるような「意味的スイス語法」(semantische Helvetismen) に分類できる。この分類に音韻的な特徴と文法的な特徴を考慮に入れると、以下のようにまとめることができる<sup>8</sup>。

表2 スイス語法の分類 (Haas 2000: 100-101, 熊坂 2011: 111-127)

スイス語法	特徴	例
音韻レベル	ある同一の語彙素に対して標準ドイツ語とは異なる発音を用いる	発音
意味レベル	ある同一の語彙素に対して標準ドイツ語とは異なる意味が与えられている	同形異義語 (Homograph)
語彙レベル	ある同一かつ特定の対象・事態に対して標準ドイツ語とは異なる語彙を用いる	語彙の相違
文法レベル	ある同一かつ特定の対象・事態に対して標準ドイツ語とは異なる文法的特徴が与えられている	時制、語順、助動詞の相違、過去形の消失、正書法

本研究では、文法レベルでのスイス語法がどのように扱われているかを考察するため、主に語彙的スイス語法と文法的スイス語法の比較をコーパスを用いて調査した。

#### 4. コーパス調査

本稿では、CHTK コーパスから、Löffler (2010: 94-112) での分類にしたがって、日常的テキスト (以下、GT)・文学的テキスト (以下、BEL)・ジャーナリズム的テキスト (以下、JT) 中の語彙的スイス語法と文法的スイス語法の用例を抽出した<sup>9</sup>。スイス語法についての先行研究を鑑みて、日常語に近いほどスイス語法を使用する割合は高く、他方、新聞などでは標準ドイツ語の表現を用いる傾向があると想定し、とりわけ、文法的スイス語法が各テキストでどのように扱われているのかを観察する。

##### 4.1 コーパス調査の結果

表3 コーパスから抽出した用例

		標準ドイツ語	スイス語法	意味
語彙的 スイス語法	1	Krankenhaus, das	Spital, das	病院
	2	Abitur, das	Matura, die	高校卒業資格試験
	3	Volksbegehren, das	Initiative, die	国民投票の請願
	4	Fahrkarte, die	Billet(t), das	電車のチケット
	5	Fahrrad, das	Velo, das	自転車
	6	Wissenschaftler, der	Wissenschaftler, der	学者、研究者
	7	parken	parkieren	駐車する
	8	nachsehen	nachschauen	調べる
	9	innerhalb (Gen.)	innert (Dat.)	～の内側で
	10	in Zukunft	inskünftig	将来に
文法的 スイス語法	11	Straße, die	Strasse, die	大通り
	12	Rigi, der	Rigi, die	リギ (山の名前)
	13	Tram, die	Tram, das	路面電車
	14	es gibt	es hat	～が存在する
	15	es (Dat.) kalt sein	(Sub.) kalt haben	(～は) 寒い

##### A. 語彙的スイス語法

コーパスで調査した語彙的スイス語法は、標準ドイツ語とスイス語法で語彙が異なるものとして、Krankenhaus/Spital「病院」、Abitur/Matur もしくは Matura「高校卒業資格」、Volksbegehren/Initiative「国民投票の請願」、Fahrkarte/Billet もしくは Billett「電車のチケット」、Fahrrad/Velo「自転車」、Wissenschaftler/Wissenschaftler「学者・研究者」、parken/parkieren「駐車する」、nachsehen/nachschauen「(辞書などで)調べる」、innerhalb/innert「～の内側で」、in Zukunft/inskünftig「将来に」である<sup>10</sup>。(3)はスイス語法の Matura の用例である。

- (3) 733 von 979 Kandidaten haben in diesem Jahr die Eidgenössische Matura  
 733 of 979 candidates have in this year the Swiss Matura  
 bestanden.  
 passed (Laetsch 1984: 47)

## B. 文法的スイス語法

文法的スイス語法の相違として選定したのは、*Straße/Strasse*「大通り」、*der Rigi/die Rigi*「リギ（という山の名前）」、*die Tram/das Tram*「路面電車」、*es gibt/es hat*「～が存在する」、*es DAT kalt sein/SUB kalt haben*「～は寒い」である。

Meyer and Bickel (2006: 29) によれば、ドイツ語圏スイス各州の学校では1920年頃からドイツの筆記体を用いなくなり、印刷の際にはドイツ文字の使用が廃止された。しかも、タイプライターの普及に併せてスイスの公用語の一つであるフランス語にも対応した植字機のキーボードを導入したことによって、スイスでは „ß“ 「エスツェット」の文字の使用が廃れていった。最終的に、チューリヒ州の学校では、1935年からßは使われていない。一方、NZZはそれ以降もßの使用を続けていたが、1974年から廃止している。

以下の図1～3はテキストの種類ごとのコーパス調査の結果である。

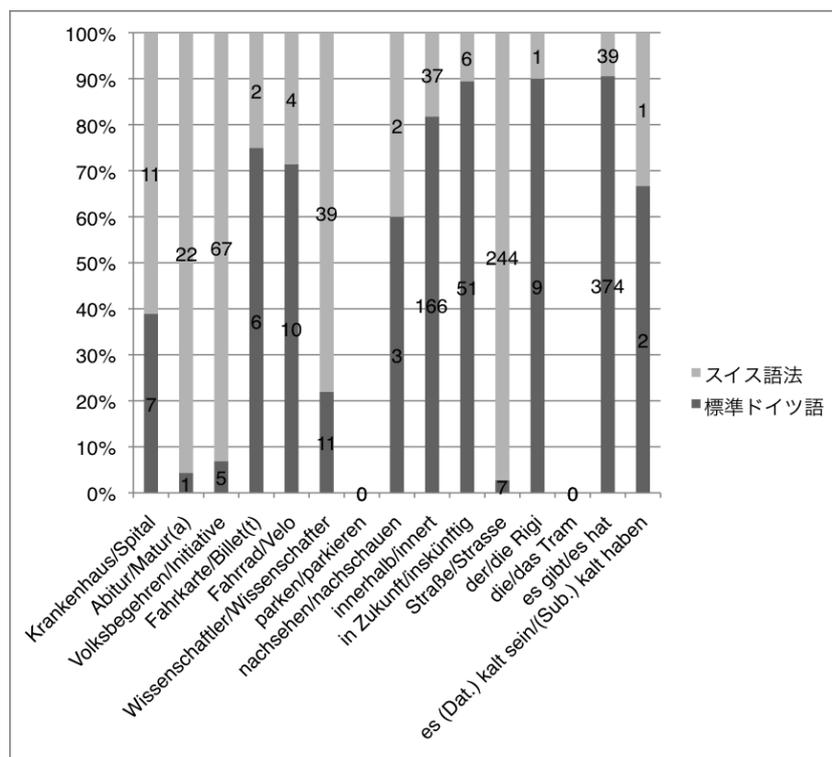


図1 日常的テキスト (GT)

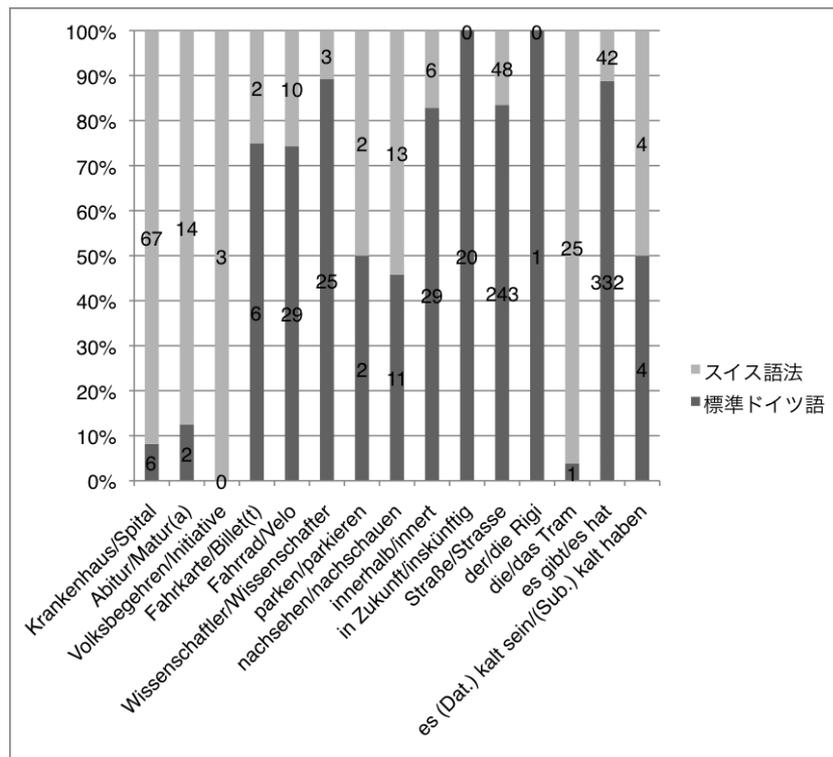


図2 文学的テキスト (BEL)

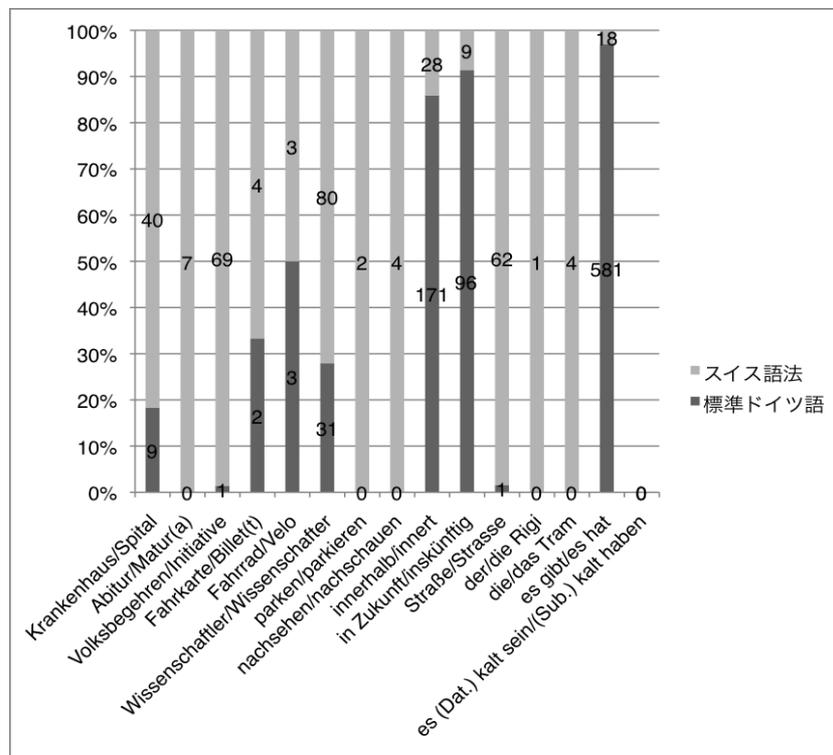


図3 ジャーナリズム的テキスト (JT)

## 4.2 コーパス調査のまとめ

### 4.2.1 語彙的スイス語法

ドイツとスイスの社会システム上の相違から生じる語彙の区別では、テキスト全種別において、スイス語法が優勢であり、三つのテキストの平均値は、Spital (84%), Matura (93%), Initiative (96%) であった。これは、おそらくスイス語法を用いる以外には正確な内容を表現することができないためであると考えられる。標準ドイツ語の語彙が出現したのも、スイス本国ではなく、ドイツや他国の制度の内容を説明する文章であった（たとえば、„Krankenhaus Boston“など）。Fahrkarte/Billett については、「スイス連邦鉄道」(SBB, Schweizerische Bundesbahnen) のホームページでも、統一して Billett が使用されているにもかかわらず、3つのテキスト種別において Fahrkarte の使用が散見され、JT 以外では Fahrkarte の使用がわずかに優勢である。Fahrrad/Velo についても、方言では Velo がしばしば使用されるが、テキスト内では Fahrrad が好まれることがわかった。特に BEL では顕著である。興味深いことに、Wissenschaftler/Wissenschaftler は、テキストに応じて使用差があり、GT および JT では、スイス語法が標準ドイツ語を上回ったが、BEL では逆の結果となった。Vademecum では、Wissenschaftler の使用を推奨しているように、新聞などでの使用で図 3（スイス語法の使用 72%）のような結果になったと思われる。他方、BEL でほぼ 90%が標準ドイツ語の語彙を使用したのは、学問的な語彙の場合に特に規定がなければ標準ドイツ語を使用する傾向にあるため、作家が標準ドイツ語の語彙を使用したのではないかと推測される。Dürenmatt (1998: 169) も「ドイツ語圏スイスの作家は、彼らが話すのとは違ったやり方で文章を書くという軋轢の中にいる」と述べているが、日常的な会話のような場面設定であっても、文学的な文章では、標準ドイツ語を用いるということが頻繁に行われるのかもしれない<sup>11</sup>。また、動詞の parken/parkieren では、用例自体が少なかったが、スイス語法が標準ドイツ語を上回った。(4) は小説の会話中の用例である。

(4) *man kann hier nirgends parkieren*  
 man can.3SG here nowhere park (Stucki 1979: 63)

「～の内側で」を意味する前置詞 innerhalb/innert については、全種別で標準ドイツ語の語彙 innerhalb が 80%を越えた。ただし、食品パッケージに記載された (5) の用例のように、innert は日常的にはよく使用される表現である。

(5) *Nach dem Öffnen im Kühlschrank aufbewahren und*  
 after the opening in-the refrigerator store and  
*innert 4 Tagen konsumieren.*  
 within 4 days consume

Duden (2012) の項目では、innert は innerhalb と同義であると明記しているが、コーパス

の用例を観察すると、*innerhalb* が „*innerhalb der Gesellschaft*“ (E. *within the society*) のように、空間的な目的語をとるのに対し、*innert* は (5) の „*innert 4 Tagen*“ (E. *within 4 days*) のような時間的なものに限られているため、母語話者にとっては意味的な使い分けも存在しているのではないかと推測できる。

#### 4.2.2 文法的スイス語法

*Straße/Strasse* の使用については、テキスト種別に応じて有意差が見られた。GT および JT では、ほぼスイス語法の *Strasse* の使用が普及しているのに対し、BEL では *Straße* の使用が 80% を越えている。スイス国内の公的な書きことば（たとえば、役所からの通知や道路標識など）では、統一して *ß* の代わりに *ss* が用いられる一方、小説などでは必ずしもそうした規則に準じておらず、出版社の対外的な意図から *ß* を用いているとも考えられる。Rigi および Tram の冠詞の性についても、テキスト種別間で差異が生じた。標準ドイツ語の正書法を扱う辞書 Duden (2013a: 899) の記述では、*der Rigi* (男性名詞)、一方、Meyer and Bickel (2006: 214) の Rigi の項目では *die* と *der* の両方を表記し、*Vademecum* の中では、方言では *die Rigi* (女性名詞) を用いるが、*der Rigi* を推奨するとしている。このように、参考文献を通じて表記が一貫していないことも、結果のばらつきの一因となっている。実際、リギ山周辺に住む人びとは、方言の影響から標準語でも *die Rigi* を使用するのに対し、日常的に Rigi という語に触れていないドイツ語圏スイスの人びとは、「山」(*der Berg*) という普通名詞が男性名詞であることから *der* を用いる傾向にあり、地域的な差異が生じていると考えられる。実際、リギ山の観光用ホームページでは、(6) の用例のように、Rigi は女性名詞として扱われている<sup>12</sup>。

- (6) *Die Rigi ist einer der meistbesuchten Ausflugsberge der*  
 the Rigi be.3SG one the.GEN most frequented excursion mountains the.GEN  
*Schweiz und wird im Volksmund oft die Königin der*  
 Switzerland and be.3PASS in-the vernacular often the queen the.GEN  
*Berge genannt.*  
 mountains called

Tram については、ほぼすべてでスイス語法の用法が観察された。Meyer and Bickel (2006: 260) でも *das Tram* と表記されており、しかも日常的にも „*im Tram, ins Tram*“ などのように前置詞を伴って頻繁に使用する表現であるため、中性名詞として十分に定着しているようである。es gibt/es hat の使用については、コーパス全種類で平均して 90% 以上の割合で *es gibt* が優勢であった。この結果にはいくつかの要因があると考えられるが、一つは、大喜 (2013) でも明らかにされたように *es gibt* の使用域の方が *es hat* よりも広いということである。es hat は、たとえば次の用例のように、とりわけ *es gibt* よりもある具体的なものの実体を表す用法で用いられることが多い。

- (7) *Im Obertoggenburg hat es Schnee in Hülle und Fülle.*  
 in-the Obertoggenburg have.3SG it snow in cover and plenty  
 (St. Galler Tagblatt, 1998.01.22)

しかも、Dürscheid and Hefti (2006: 153) の調査でも考察されているが、*es hat* という表現自体を方言として認識している話者も多いため、書きことばの場合、たいていは *liegen* (*E. lie*) や *stehen* (*E. stand*) といった別の所在動詞で置き換えられていると推量できる。しかしながら、(7) の新聞中での用例のように、編集や校正が行われ、規範的意識が強く働くはずの場面でも使用が確認されることから、スイス式標準ドイツ語使用者にとってはきわめてなじみ深い表現であると考えられる。また、GT や BEL の会話の場面などでも用例を確認でき、日常的には定着したスイス語法であると判断できるであろう。一方で、*es DAT kalt sein/SUB kalt haben* の用例数は、あまり多くはなかった。JT で確認できなかったのは、「(～が) 寒さを感じている」という表現自体がきわめて口語的であるため、新聞などには出現しないのであろうと推測できる。とはいえ、BEL コーパスの小説中の会話文で (8) のような表現が観察されたり、日常的にもよく使われている。

- (8) *hast du immer noch kalt?*  
 have.2 you always still cold  
 (Beutler 1976: 33)

Dürscheid and Hefti (2006: 153) のアンケート調査では、標準ドイツ語話者 97.1% が許容するとみなした „*Mir ist kalt*“ を許容しないと回答したスイス式標準ドイツ語話者は全体の 16.9% であり、*haben* を用いた表現に書き換えるという回答まで観察されている。

#### 4.3 考察

コーパス調査からは、必ずしも日常的なテキストの方が新聞などのテキストに比べてスイス語法が出現する頻度が高いという結果にはならなかった。それは特に語彙的スイス語法において顕著である。Löffler (2010: 95) の指摘にもあるように、日常的なテキストほど非公式的な要素が強く、社会的な親密度も高いと言える。それゆえ、日常的なテキストでは、日常的な話しことばであるスイスドイツ語の語彙を基礎とするスイス語法を標準ドイツ語よりも好んで使用すると想定していた。ところが、日常的なテキストではその使用法にかなりの揺れが見られ、たとえば「電車のチケット」や「自転車」のような語では標準ドイツ語の語彙を選択する割合が高いことが分かった。その一方で、公式的で権威的でもありうるジャーナリズム的テキストでは語彙的スイス語法の浸透を確認できることから、日常的な書きことばとしてよりも、むしろ規律的な書きことばとしてスイス語法は十分に定着していると考えられることもできよう。

とはいえ、文法的スイス語法については、全テキスト種別を見ても、やはり実際のテキストに十分に反映されているとは考え難い。特に „*es hat*“ や „*ich habe kalt*“ などの表現

は、方言の影響を備えていることが明確であるため、そうした言語表現を受け手としては違和感無く理解できたとしても、実際に規範を意識した書きことばとして言語を産出する際には表現を改める場合が多いのであろう。語彙的スイス語法の中でも、名詞よりも前置詞や副詞に対して、相応する標準ドイツ語の語彙を選択する傾向にあるのも、そうした規範的な意識が働いている可能性が高い。加えて、Dürscheid and Hefti (2006: 158) では、新聞などのコーパス調査とスイス式標準ドイツ語話者を対象としたアンケート調査の結果が必ずしも一致しないのは、そうした人びとが書きことばとしては幼少期から標準ドイツ語もしくはスイス式標準ドイツ語のテキストに触れているとはいえ、その際、ある表現が方言と共通しているのか、それとも標準ドイツ語に特徴的であるのかということ意識して知覚してはいないからであると結論づけている。それゆえ、スイス式標準ドイツ語使用者が受け手として許容でき、かつ標準ドイツ語であるとみなすことのできる表現は、実際に使用する書きことばよりもさらに広範囲なものであると考えられる。このような言語表現の普及度と母語話者の許容度との間にある大きなずれが、ドイツ語圏スイスの標準語を特定することを困難にする要因の一つとなっている。

またどのような読者を対象としているのかということも重要な要因の一つである。NZZは、スイス国内だけでなく国際紙としてドイツを含めた海外の読者も想定しているため、スイス国内での言語的特徴の認知度を意識しつつも、方言的な要素を色濃く持った文法的特徴を備えた語彙を避けて出版しているということは想像に難くない。実際、*Vademecum*で扱われているのは、いくつかの前置詞の格支配の相違などを除けば、語彙的もしくは意味的スイス語法に限られている<sup>13</sup>。

## 5. おわりに

本研究の調査では、辞書などで扱われる「スイス語法」とCHTK内の実際の用例には、多くの相違があることが明らかになった。スイス語法の中でも、とりわけ前置詞や副詞、名詞以外の文法的特徴は、語彙的特徴と比較して書きことばで用いられることは少ない。現状では、新聞などのメディアについてはDuden (2013a)を基本とし、適宜スイス語法を採用するという方針がコーパス調査にも反映していると言えるが、日常的なテキストでは表現の選定にかなりの揺れがあるし、文学的テキストではむしろ標準ドイツ語の表現を用いる傾向が強いことが分かった。Concetta Di Paolo and Glaser (2006: 12)でも、「そもそも何を誰が標準語として定義し、どれほどの変種が認められ、それに対して、何が標準語的でないものとして方言の領域に含まれるのかに答えることは容易ではない」と述べられている。先に触れた通り、スイス式標準ドイツ語に対しても国の機関が多く関与しているが、スイス語法の選定については、規範的な観点からだけでなく、ある言語表現の現実の使用と定着、さらに母語話者の許容度も考慮に入れる必要があるであろう。本稿での考察と照らし合わせて考えてみると、*Vademecum*はそもそも規範的な立場をとっている。他方、Bickel and Landolt (2012)とAmmon *et al.* (2004), Meyer and Bickel (2006)は記述的な立場をとる辞書である<sup>14</sup>。両者の決定的な違いは、語順、過去形の消失などの文法的スイス

語法の記述の充実度である。Bickel and Landolt (2012: 90-93) では、名詞の性や前置詞の格支配などの違いについては詳細に記述しているものの、今回のコーパス調査でも観察できた表現、„es hat“ や „ich habe kalt“ などについては一切述べられていない。スイス式標準ドイツ語の使用実態を鑑みた用例主義の立場をとるならば、今のところ Ammon *et al.* (2004) もしくは Meyer and Bickel (2006) が最もそれに近い形式であると言えるであろう。

さらに、本稿ではあまり触れることができなかったが、スイス式標準ドイツ語研究に際して「言語使用ないし言語行動についての志向意識」もしくは「言語そのものないし言語行動についての規範」といった言語意識や言語規範などの社会言語学的な側面を無視することはできない<sup>15</sup>。今回のコーパス調査では、ジャーナリズム的テキストを除いて、スイス式標準ドイツ語使用者がスイス語法の語彙や文法を意識的に選択することはないとみなしたが、場合によっては意図的にスイス語法を用いることもありうる。たとえば、ドイツ語圏スイスの政治家は、しばしば演説などで、標準ドイツ語ではなくスイス式標準ドイツ語を使用することがある。そうした話し手の「言語態度」(Spracheinstellung) を分析することは、スイス式標準ドイツ語についての議論を深めるために必要不可欠である。とはいえ、そうしたドイツ語圏スイスの人びとの標準語や方言に対する言語意識の問題については今後の課題としたい。

## 注

1. Ammon *et al.* (2004), Meyer and Bickel (2006) では文法的特徴についても考慮されているが、Duden (2012) および Duden (2013a) ではあまり触れられていない。Dürscheid and Hefti (2006), Dürscheid and Sutter (2014a, 2014b) では、辞書内のスイス語法の文法的独自性の記述について議論している。
2. Bickel *et al.* (2009: 5) に従えば、CHTK は、スイスで使用される 20 世紀 (1900-2000) のドイツ語を記録するために作製され、2009 年 4 月からインターネット上でも公開されている。コーパスは、「日常的テキスト」(Gebrauchstexte)、「客観的テキスト」(Sachtexte)、「文学的テキスト」(Belletristik)、「ジャーナリズム的テキスト」(journalistische Prosa) に分類され、総語数は約 2000 万語である。
3. Glück (2010) によれば、標準語は、「文章語」(Schriftsprache)、「文学言語」(Literatursprache)、「文化言語」(Kultursprache)、「統一言語」(Einheitssprache)、「標準変種」(Standardvarietät) などとしばしば同義語とみなされる。
4. Meyer and Bickel (2006: 263) には、ドイツ語圏スイスでは、小説や新聞の中でも Trottoir の使用を確認できるのに対し、ドイツではもはや古風な表現として扱われると記述している。Walser (2006: 189) のドイツ語圏の日刊新聞を対象としたコーパス調査(2004 年 7-12 月分)によれば、Trottoir は、スイスの新聞 *Tages-Anzeiger* (82.6%), *NZZ* (80.2%) では標準的な語彙とみなされる一方で、ドイツの新聞 *Frankfurter Allgemeine* (13.9%), *Süddeutsche Zeitung* (18.5%) やオーストリアの新聞 *Der Kurier* (0.8%), *Der Standard* (22.2%) では、Trottoir 以外の表現が優勢となっている。

5. CHTK および COSMAS II から採用した用例の出典は、参考文献内に記載する。ただし、日刊新聞 *St. Galler Tagblatt* に関しては、発行年月日のみを用例末に明記する。
6. <http://www.atlas-alltagssprache.de/runde-3/f04c/> (最終アクセス (2015年1月28日)) ザルツブルク大学の言語地図プロジェクト *Atlas zur Deutschen Alltagssprache (AdA)* では、標準ドイツ語の語彙や文法の地域的な相違を調査しており、特定の非人称存在表現に対して *sein/haben/geben* のいずれの動詞を用いるかについて、オンライン上でその地理的分布を公開している。
7. <http://www.nzzmediengruppe.ch/produkte/zeitungen/> (最終アクセス (2015年1月28日)) NZZ グループ全体では、*Neue Luzerner Zeitung* や *St. Galler Tagblatt* などのドイツ語圏スイスの主要な新聞を傘下に収めている。
8. スイス語法の音韻的特徴については、とりわけ高橋 (2009b) の中で詳述されている。Meyer (1994) では、スイスでのみ使用される表現 (*reine Helvetismen*)、スイスとその近隣地域で使用される表現 (*Helvetismen plus*)、スイスの特定の地域でのみ使用される表現 (*Helvetismen minus*) と地域的な基準に従ってスイス語法を分類している。Farø (2004: 880) では、絶対的スイス語法 (*Absolute Helvetismen*)、すなわちスイスドイツ語を基にした語彙や文法の言語現象に関わるようなものと、他方、相対的スイス語法 (*Relative Helvetismen*)、すなわちスイスドイツ語だけではないが、標準ドイツ語のテキストに対してスイスドイツ語のテキストに出現する頻度が高いような言語的特徴に関わるものとに分類する。本稿では、主に機能的な分類に基づいてスイス語法を考察する。
9. Löffler (2010: 94-112) では、言語機能の観点から、言語の使用法を五つの領域、すなわち日常語・文学用語・学問的専門用語・官庁語・メディア用語に区別している。Bickel *et al.* (2009: 18) によれば、CHTK ではそれぞれテキストの種類別にコーパスを分類しており、本稿で検索した用例は 1975-1999 年の 25 年分で、それぞれ、「日常的テキスト」(1395 テキスト/1088953 語)、「文学的テキスト」(47 テキスト/1007049 語)、「ジャーナリズム的テキスト」(1794 テキスト/1087926 語) である。
10. *Vademecum* では、標準ドイツ語の *Volkswirtschaftler* 「経済学者」はスイスでは奇異に響くので、*Volkswirtschaftler* (*Wissenschaftler* も同様) を、*parken/parkieren* の区別では、通例 *parkieren* をそれぞれ用いるとしている。
11. たとえば、Dürrenmatt (1980) の中では、標準ドイツ語の語彙や正書法に基づく *Fahrkarte* (4 例) や *Straße* (16 例) の使用が見られる。また、CHTK 内の文学的テキストでは、1990 年代に限っても、*Straße* (66 例) の方が *Strasse* (18 例) よりも優勢である。
12. <http://www.rigi.ch/Reiseinformationen/Die-Rigi> (最終アクセス (2015年1月28日))
13. *Vademecum* (2014: 9-11, 141-142) では、2000年5月15日以来、ドイツの正書法が採用されており、具体的には、最新の *Duden* (2013a) が許容する使用法に従っている。しかしながら、いくつかの言語表現に関しては、スイスでの慣用を優先している。本文

で触れた表現に加え、たとえば、*Shg. Caramel/hg. Karamell* 「キャラメル」、*Shg. Chauffeur/hg. Fahrer* 「運転手」、*Shg. grillieren/hg. grillen* 「(網などで) 焼く」などが用いられるほか、「土曜日」を意味する *Sonneabend* は北部ドイツ語的語彙なので、引用以外は *Samstag* に言い換えられる。また、*trotz* 「～にもかかわらず」は、標準ドイツ語では通常属格支配だが、与格支配で統一される。

14. 辞書内の規範性と記述性について、Hentschel and Wyedt (2003) では、「文法の著者がその著書で追求している意図に従って、規範文法 (normative Grammatik) と記述文法 (deskriptive Grammatik) が区別される。規範文法が読者に言わんとするところは、正しい読み書きの規則である。ドイツ語の文法記述の歴史のなかでは、特にドイツ語の統一的な標準語 (Hochsprache)、文章語 (Literatursprache) の形成に貢献することを課題としていた 17、18 世紀に、数多くの規範文法が生まれた。これに対し、純粋な記述文法は、今ある言語使用 (Sprachgebrauch) をただ単に記録することを目標とする。記述文法では、確認された形態 (Form) に関するいかなる価値判断も差し控える」(西本他訳: 5-6) と記している。
15. 真田他 (1992: 100-101) および Löffler (2010: 42-43) を参照。

#### 略号一覧

DAT	dative
E.	English
GEN	genitive
Hg.	High German
PASS	passive
PST	past
SG	singular
<i>Shg.</i>	Swiss High German
SUB	subjective
1	1st person
2	2nd person
3	3rd person

#### 参考文献

- Balmer, Albrecht. 1950. *Gewandtheit im schriftlichen Ausdruck. Sonderdruck aus der PTT-Zeitschrift*. Bern: Schweizer Post- Telegraphen- und Telephonverwaltung.
- Beutler, Maja. 1976. *Flissigen fehlt auf der Karte*. Gümliigen/Bern: Zytglogge Verlag.
- Bickel, Hans, Markus Gasser, Annelies Häcki Buhofer, Lorenz Hofer and Christoph Schön. 2009. Schweizer Text Korpus –Theoretische Grundlagen, Korpusdesign und Abfragemöglichkeiten. *Linguistik online* 39 (3): 5–31.

- Christen, Helen. 2001. Die regionalen Besonderheiten der deutschen Standardsprache in der Schweiz. In Elisabeth Knipf-Komlósi and Nina Berend (eds.), *Regionale Standards: Sprach Variationen in den deutschsprachigen Ländern*, 120-159. Budapest: Dialóg Campus Kiadó.
- Christen, Helen, Elvira Glaser, and Matthias Friedli (eds.). 2014. *Kleiner Sprachatlas der deutschen Schweiz. 5. überarbeitete und erweiterte Ausgabe*. Frauenfeld: Verlag Huber.
- Concetta Di Paolo, Maria, and Elvira Glaser. 2006. Wie lassen sich Helvetismen erkennen? In Christa Dürscheid and Martin Businger (eds.), *Schweizer Standarddeutsch. Beiträge zur Varietätenlinguistik*, 11-22. Tübingen: Narr.
- 大喜祐太. 2013. 「スイス式標準ドイツ語非人称存在表現の諸相 —es hat と es gibt の対立をめぐって」『言語科学論集』19: 103-125.
- Dürscheid, Christa. 2012. *Einführung in die Schriftlinguistik. Mit einem Kapitel zur Typographie von Jürgen Spitzmüller. 4. überarbeitete und aktualisierte Aufl.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Dürscheid, Christa, and Inga Hefti. 2006. Syntaktische Merkmale des Schweizer Standarddeutsch. Theoretische und empirische Aspekte. In Christa Dürscheid and Martin Businger (eds.), *Schweizer Standarddeutsch. Beiträge zur Varietätenlinguistik*, 131-161. Tübingen: Narr.
- Dürscheid, Christa and Sutter Patrizia. 2014a. Grammatische Helvetismen im Wörterbuch. *Zeitschrift für angewandte Linguistik* 60 (1): 37-65.
- Dürscheid, Christa and Sutter Patrizia. 2014b. Wie werden grammatische Helvetismen in Nachschlagewerken behandelt? Ratgeber geben nicht immer Rat -oder unterschiedlichen. *Sprachspiegel* 4, 111-118.
- Dürrenmatt, Friedrich. 1980. *Der Hund, Der Tunnel, Die Panne Erzählungen*. Zürich: Diogenes.
- Dürrenmatt, Friedrich. 1998. *Meine Schweiz*. Zürich: Diogenes.
- Elspaß, Stephan. 2010. Regional Standard Variation in and out of Grammarians' Focus. In Alexandra N. Lenz and Albrecht Plewnia (eds.), *Grammar Between Norm and Variation*, 127-144. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Farø, Ken. 2004. Verbildete, verbeamtete und überalterte Deutschschweizer? Das Schweizer hochdeutsche im Wörterbuch und sonst. *Proceedings from the 2004 EURALEX Congress in Lorient, France*: 879-884, Lorient: EURALEX.
- Haas, Walter. 2000. Die deutschsprachige Schweiz. In Hans Bickel and Robert Schläpfer (eds.), *Die viersprachige Schweiz*, 57-138. Aarau/Frankfurt am Main/Salzburg: Sauerländer.
- Hentschel, Elke, and Herald Weydt. 2003. *Handbuch der deutschen Grammatik 3. Auflage*. Berlin: Walter de Gruyter. (西本美彦・高田博行・河崎靖 (訳) 『ハンドブック 現代ドイツ文法の解説』東京: 同学社, 1994)

- 河崎靖. 2008. 「方言学の現在」『ドイツ文學研究』53: 43-62.
- Koch, Peter, and Wulf Oesterreicher. 1985. Sprache der Nähe–Sprache der Distanz. *Romanistisches Jahrbuch* 36: 15-43.
- Kuhn, Heinrich. 1986. *Schatz und Muus Erzählung*. Basel: Lenos.
- 熊坂亮. 2004. 「ドイツ語圏スイスの言語状況—方言意識と言語使用」『北海道大学独語独文学研究年報』31: 30-46.
- 熊坂亮. 2010. 「スイスのドイツ語：方言と標準変種の接点」『北海道大学独語独文学研究年報』36: 22-40.
- 熊坂亮. 2011. 『スイスドイツ語—言語構造と社会的地位』北海道: 北海道大学出版会.
- Laetsch, Walter E. 1984. Bildungspolitische Kurzinformationen. *Gymnasium Helveticum* 1. 46-48. Aarau: Verein Schweizerischer Gymnasiallehrer.
- Löffler, Heinrich. 2003. *Dialektologie eine Einführung*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Löffler, Heinrich. 2010. *Germanistische Soziolinguistik 4. neu bearbeitete Aufl.* Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Meyer, Kurt. 1994. Das Deutsch der Schweizer. *Terminologie et Traduction* 1, 9-39. Luxembourg: Communautés européennes.
- Polenz, Peter von. 1999. *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart, Vol. 3: 19. und 20. Jahrhundert*. Berlin/New York: de Gruyter.
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹. 1992. 『社会言語学』東京: 桜楓社.
- Schweizerische Bundeskanzlei. 2008. *Leitfaden zur deutschen Rechtschreibung 3. vollständig neu bearbeitete Aufl.* Bern: Schweizerische Bundeskanzlei.
- Schweizerische Konferenz der Kantonalen Erziehungsdirektion. 2006. *Die Neuregelung der deutschen Rechtschreibung. aktualisierte und erweiterte Aufl.* Biel: Ediprim AG.
- Stucki, Lorenz. 1979. *Yuriko*. Frauenfeld/Stuttgart: Huber.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子. 2011. 『歴史語用論入門』東京: 大修館書店.
- 高橋秀彰. 2008. 「ドイツ語圏スイスにおける言語状況—標準変種の規範化と方言の拡大」『関西大学外国語教育研究』15: 71-85.
- 高橋秀彰. 2009a. 「スイス連邦の公用語と国語」『関西大学外国語学部紀要』1: 27-40.
- 高橋秀彰. 2009b. 「標準ドイツ語の収束と分散—標準変種の確立と脱標準化に関する考察」『関西大学外国語教育研究』17: 83-98.
- Troxler, Ruth, and Gsteiger Thomas. 2012. *Schwyzerdütsch für Anfänger*. Lenzburg: Faro im Fona Verlag.
- Walser, Cyrille. 2006. Frequenzhelvetismen Eine korpusanalytische Studie. In Christa Dürscheid and Martin Businger (eds.), *Schweizer Standarddeutsch. Beiträge zur Varietätenlinguistik*, 179-194. Tübingen: Narr.
- Weber-Arndt, Daniel. 2012. So gelangen Helvetismen in den Duden. Einblicke in die Arbeit des schweizerischen Dudenausschusses. *Sprachspiegel* 1: 8–14.

## 辞書・コーパスなど

- Ammon, Ulrich and Rhea Kyvelos. (Hrsg.) 2004. *Variantenwörterbuch des Deutschen: Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Lichtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Bickel, Hans, and Landolt Christoph. 2012. *Schweizerhochdeutsch Wörterbuch der Standardsprache in der deutschen Schweiz*. Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- Corpus Search, Management and Analysis System II. (COSMAS II)
- Duden. 2011. *Richtiges und gutes Deutsch. Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle. 7. vollständig überarbeitete Aufl.* Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden. 2012. *Deutsches Universalwörterbuch 7. überarbeitete und erweiterte Aufl.* Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden. 2013a. *Die deutsche Rechtschreibung. 26. völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl.* Hrsg. von der Dudenredaktion. Berlin/Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- Duden. 2013b. *Schweizer Schülerduden Rechtschreibung. 6. überarbeitete und erweiterte Aufl.* Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Glück, Helmut. (ed.) 2010. *Metzler Lexikon Sprache. 4. Aufl.* Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Meyer, Kurt, and Hans Bickel. 2006. *Schweizer Wörterbuch: so sagen wir in der Schweiz*. Frauenfeld: Verlag Huber.
- Neue Zürcher Zeitung. 2014. *Vademecum. 14. überarbeitete und ergänzte Aufl.* Zürich: Verlag Neue Zürcher Zeitung.
- Pfeifer, Wolfgang. 1997. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Schweizer Text Korpus. (CHTK)

## **Who Chooses a Standard Variety of German-speaking Switzerland? A Corpus Research on Grammatical Helvetism in Written Texts**

Yuta Daigi

This research discusses how grammatical Helvetism has been treated in actual written texts in the German-speaking part of Switzerland, especially in daily texts, literature texts, and journalistic texts, in comparison with lexical Helvetism, to make clear the language norm in the standard variety of High German in Switzerland. The grammatical uniqueness of Helvetism has rarely been dealt with in the German dictionaries published in the German-speaking part of Switzerland. Moreover, since it is difficult to determine a grammatical difference between the dialect (Swiss German) and the standard variants, grammatical Helvetism is less likely to be recognized as a standard variety than lexical Helvetism. Therefore, some grammatical features of Helvetisms are often considered to be wrong usages. For instance, according to some orthographical dictionaries and grammars based on High German, grammatical Helvetism is regarded as a deviation from the standard variants, particularly of the northern areas of Germany.

In Section 2, the diglossic situation of Swiss German and a standard variety of Swiss High German is overviewed, and issues on Swiss High German are raised. In Section 3, the definition of Swiss High German is examined based on the previous studies. The description and classification of Helvetisms are investigated with the dictionaries. Section 4 applies to the classification of Helvetisms introduced in Section 3 to examine the examples from Schweizer Text Korpus (CHTK) according to the type of texts. Based on the results of this corpus research, Chapter 5 discusses the way to compile the dictionaries in the German-speaking part of Switzerland.